

ALL LIVING
BEINGS ARE CREATED EQUAL

徳洲新聞

TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP NEWS

7/OCT. 2019

No. 1205



10月7日 月曜日
www.tokushukai.jp

発行：一般社団法人徳洲会
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14階
TEL: 03-3262-3133
制作：一般社団法人徳洲会 広報部
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14階
TEL: 03-3288-5580 FAX: 03-3263-8125
Email: news@tokushukai.jp

9月9日の提携調印式後に徳洲会、北京世紀康瑞病院集団、伊藤忠商事の関係者が記念撮影。牛島浩・同社建機・産機部長（前列左から2人目）、鈴木隆夫・同会理事長（その右へ3人目）、朱敬民・同集団董事長（その右へ2人目）



一般社団法人徳洲会

中国最大の民間医療グループと提携

一般社団法人徳洲会は9月9日、中国の北京世紀康瑞病院集団と中国人患者さんの治療・健診の受け入れや同集団に対する病院経営・管理手法の確立支援、医療人材・技術交流について提携した。同集団は北京市朝陽区を中心に11病院（計7,000床）を有し、中国最大級の民間病院グループ。今後5年以内に2万床に拡大する計画を打ち出している。今回の提携により、今後、徳洲会グループが推進するメディカル（医療）ツーリズムに拍車がかかりそうだ。

患者さん受け入れや経営手法確立支援

徳洲会は「生命だけは平等だ」の理念の下、これまで40カ国と医療協力に関する覚書（MOU）を締結、病院開設支援や透析機器の寄贈、透析センターの開設支援などを行ってきた。また、徳洲会は国際的な医療機能評価のJCI認証取得病院が8病院、外国人患者受入れ医療機関認証制度（JMIP）の認証取得病院が12病院あり、医療ツーリズムを積極的に推進している。

こうした徳洲会の活動に着目した伊藤忠商事が仲立ちとなり、今回の提携が実現した。同社は今年3月、香港の投資会社である中信資本とともに、同集団に資本参加。これは拡大の一途をたどる北京市内の医療需要に対応するため、同集団に日本式の病院運営管理や病院関連事業の受託運営サービスを提供、同集団の医療の質や経営効率の一層の向上をサポートするのが目的。

また、伊藤忠商事は日本の医療機関と連携し、日本の医療機器・サービス、中国人患者さんの日本国内でのインバウンド治療や健診ニーズへの対応も視野に入れ、その道筋を模索していた。8月26日には同社が仲介し、藤田医科大学と同集団が提携している。

徳洲会グループは1973年創設、現在71病院（計1万7,881床、2019年10月時点）含む350以上の医療・介護・福祉施設を展開し、救急・急性期医療などに強みをもつ日本最大の民間病院グループ。一般社団法人徳洲会はグループの本部機能を有し、医薬品や医療機器・材料などをグループのスケールメリットを生かし低価格に一括購入し、傘下の病院・施設に供給している。

また、徳洲会病院・施設への巡回経営指導や、2カ月に1回、全国の徳洲会病院の幹部が参加し経営対策など協議する医療経営戦略セミナーなどを実施。このような徳洲会創設以来培ってきたきめ細かい病院運営管理手法や受託サービスのノウハウを同集団に提供していく考えだ。

インバウンド治療・健診事業については、徳洲会と同集団が直接連絡を取り合い、①中国人患者さんが安心して徳洲会病院を受診、②日中病院間で患者情報を正確に伝達、③同集団が中国に帰国後の患者さんに適切なフォローアップを行う。これに関して伊藤忠商事が全面的にバックアップする。

今回の提携の背景には日中両国の政策もある。中国政府は年間100兆円を超える医療費を抑制しながらも、増え続ける医療需要に対応するため、民間資本の活用や民間病院の拡充を支援している。一方、日本政府は医療技術・サービスのアウトバウンド（海外展開）を推進しており、日中の医療機関にフォローアップとなっている。

修了式では中村啓介・看護部長が司会進行。まず赤崎満院長が、研修を修了した同院の看護師5人に研修修了書を授与、続いて「ぜひ他の職員の見本になってください」とエールを送った。

次に鶴飼悦子・看護部長が「研修1期生として働きながら研修を実施し、大変な時間を過ごしたと思います。特定行為を実

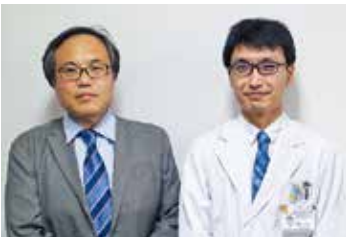
践することが目的ではなく、あくまで看護をベールに考え、精進してください」と語りかけた。

研修生を代表して加島卓看護師は「研修で学んだ医学的な視点だけでなく、看護の視点を合わせること、より良い看護ケアの提供につなげていきたい」と熱意を見せた。

2019年度の開講式は10月1日に実施、新たに3区分を加え、院内外から計19人が研修する。

前立腺がんの治療は進行度合いにより、手術、放射線治療、ホルモン療法を組み合わせて行う。同院の放射線治療科は、2012年に県内で初めて高精度放射線治療装置「トモセラピー」を導入。泌尿器科と強固に連携し、患者さんの要望に応じた治療に尽力している。

前立腺は直腸と近接しているため、前立腺に放射線を照射すると、どうしても直腸にまで当たり



泌尿器科の向山部長（左）と放射線治療科の眞鍋良彦部長が密に連携

に触れないようにできる。また、注入したハイドロゲルは痛みを引き起こすことなく、放射線治療の実施期間中は注入した部位にとどまり、放射線治療の終了後は徐々に体内に吸収される。

同治療法の導入により、同院では前立腺がん照射する放射線量を従来の2・0グレイから2・5グレイにアップ、照射回数も39回から28回にまで減らすことができた。7月17日に1例目を実施、以降、順調に症例数を伸

ばしている。眞鍋良彦・放射線治療科医長は「ハイドロゲルを挿入する際に、局所麻酔下での針刺しは必要ですが、最低限の侵襲で最大限の効果が得られる治療法だと思います」と胸を張る。

ハイドロゲルを注入する手技を担う向山秀樹・泌尿器科部長は「とくに

離島の患者さんを治療する場合には、治療日数が短くなることに加え、合併症が起こらないことも大切なので、とても有用です」と太鼓判。眞鍋医長は「今後、サイバーナイフが導入された場合、5回の照射で治療が終わるので、さらに患者さんの負担も減らせると思っています」と展望する。

同院では7月にトモセラピーをアップグレード、よりピンポイントにターゲットを照射できるダイナミックジョーという技術が搭載された。眞鍋医長は「患者さんに副作用なく治療を完遂していた

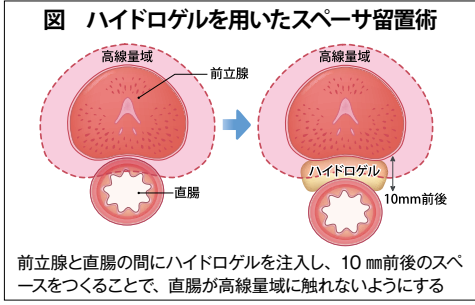
ナミックスという技術が搭載された。眞鍋医長は「患者さんに副作用なく治療を完遂していた

だくため、これからも最新の技術に目を向けながら、努力していきます」と意欲的だ。

南部徳洲会病院（沖縄県）は前立腺がんの放射線治療に、ハイドロゲル（三次元の網目構造内に水分を含んだ物質）を用いたスペーサ留置術を導入した。これはハイドロゲルにより、直腸と前立腺の間にスペーサをつくり、直腸への照射を低減する治療法で、昨年6月に保険適用された。体の外から放射線を当てる外照射に同治療法を用いるのは県内初の試みだ。

トモセラピーもアップグレード

に触れないようにできる。また、注入したハイドロゲルは痛みを引き起こすことなく、放射線治療の実施期間中は注入した部位にとどまり、放射線治療の終了後は徐々に体内に吸収される。



南部病院開設40周年 記念講演に300人超 放射線治療と乳がんテーマ

南部徳洲会病院は9月23日、40周年記念講演を開催した。地域の医療関係者や患者さんら300人超が来場。開院40周年の感謝を伝えるとともに最新の医療情報を共有、今後の地域貢献を約束した。

冒頭、赤崎満院長が「私たちは1979年に開院、徳洲会の“生命だけは平等だ”の理念の下、日々努力しています。これまで来られたのも地域の方々のご支援のおかげだと、職員一同感謝しています」と謝辞を述べた。

その後、眞鍋良彦・放射線治療科医長が「放射線治療～トモセラピーとサイバーナイフが切り拓く未来」と題し講演した。「がんは食事療法したりするだけでは治りません」と誤った情報に対し注意喚起。放射線治療についても「正しく知る」ことが大切だと強調した。

術後乳がん、脳転移、前立腺がん、骨転移に対する放射線治療の有効性や展望など解説。最後に「がんが進行すると、希望の治療が“賞味期限”になり、受けられなくなる可能性があります。検診を受け早期発見に努めましょう」と呼びかけた。

続いて昭和大学病院の明石定子・乳癌外科教授が「乳癌診療最前線」をテーマに講演した。働き盛りに乳がんが増えているという統計を提示。運動、閉経後の肥満予防、禁煙など生活習慣を改善する重要性を説いた。

自己検診として「乳房に痛みがあれば専門医を受診すべきか」という問いかけに対し、会場の反応は半々。実際は乳がんの痛みはあまりなく、乳房のしこり、分泌液、変形などが発見の契機となると説明、40歳以降は検診を受けるべきと強調した。最後に、乳がん治療は体に負担のない治療に進化していると言及、「正しい情報をもとに、自分にとって最適な治療を選択しましょう」と締めくくった。



来場者に感謝を述べる赤崎院長



「40歳を超えたら乳がん検診を」と明石教授



赤崎院長（前列中央）や鶴飼・看護部長（その右）らが研修生にエール